

電信通り商店街

コーヒー焙煎工場核に

空き店舗活用し交流拠点

帯広電信通り商店街振興組合(長谷渉理事長)は、市内東2南5の空き店舗を活用し、「コーヒーロースタリ(焙煎)ばいせん工場」を核にしたユニークな交流・協働拠点の整備を進めている。焙煎作業を通じ、障害者の就労や若者の創業を支援し、商店街のにぎわいも創出するのが狙い。3月中旬のプレオープンを目指す。

来月から就労支援も



吉田さんを取り囲み、看板の取り付け、拠点整備を進める

計画によると、施設内にロースター(焙煎機)を置き、来場者にカップリング(味見・試飲)や焙煎などの体験をしてみようほか、

も活用してもらおう。また、コーヒーに関する技術や経営に関わるセミナーなども開催していく。
場所は元自動車整備工場施設で、電信通沿いからやや内側に入った商店街エリア内。現在改修作業中で今月中旬に終える予定。施設名は「ホッチーノ・ロースタリ」で、道の地方創生推進交付金「空き店舗を活用したコミュニティビジネス創出加速事業」を受けた。事業費は約230万円。
運営は米国焙煎士資格を持ち、自身で機械を所有する吉田陽一さん(60)と土幌に委託する。吉田さんは同商店街内に昨年開業したコーヒー専門店「ホッチーノコーヒーズ」の豆の焙煎を担当していた。JICA(国際協力機構)の青年

海外協力隊やシニアボランティアでチュニシアなどに滞在経験もある。
インディアナ州立天体育学部修士課程を修了。アスレチックトレーナーとして、NECのバレーボールチームや陸上競技部のサポートにも当たり、元マラソン選手の増田明美さんを担当したこともある。

吉田さんは「豆の種類や焙煎の仕方によって味も香りも変わる。多くの人に魅力を伝えたい」と話している。
同商店街は2011年に経産省の認定を受け活性化事業計画を策定し、「高齢者や障害者が共生、協働できる」をテーマに各種の空き店舗対策事業を展開。最

近では空いた古民家を改修し、「コミュニティ施設」Salon齋藤亭を開業し、建物所有者で管理者の富山弘美さんらの奮闘で利用状況は好調に推移している。
長谷理事長は「新たな交流拠点を定着させ、さらににぎわいを創出したい」と話している。(佐藤いづみ)